c h a i r

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｈａｉｒ

【Ｎコード】
Ｎ００３４Ｔ

【作者名】
奥田徹

【あらすじ】
どんな仕事も続かなかった青年。小さな飲み屋「ｃｈａｉｒ」で、バイトをはじめる。ある時，コップを拭いてると先輩の橘さんがこんな事を言った。
「ずーっとコップ拭いてると哲学感じる時ない？」
「え？」
「なんで俺コップなんか拭いてんだろうって」
「・・はぁ。」
そこにいる事で、沢山の気持ちが行き場所を彷徨う。主人公が辿り

つく行き場はいったい…。

（前書き）

１９９７年に書いた作品です。僕がはじめて書いた小説です。僕自身もとっても若く、色々と疑って生きてました（笑）拙い文章ですが、どうぞ最後まで読んでやってください！

僕はこれといった取り柄がない。
スポーツも駄目なら話すのも苦手。歌の才能も無いし、
絵なんて学校の授業以外、描いた事もない。
勿論、勉強もろくな成績じゃなかった。
時間は常に流れて行き、毎日をただ何となく過ごしている。
それが僕の現実であり、逃避できる夢や彼女もない。
だからどうしたと言われるかもしれないが、別にどうする気
もない。ひとつ気になるのが、僕はよく仕事を変える事だ。
長続きしない。働けば働くほど，そこにいる人達の顔にうんざり
する。今までいろんな仕事をした。工事現場、喫茶店、引越し屋、
居酒屋、本屋、ビデオ屋、映画館、ＣＤショップ、レストラン、看
板屋
まだまだあるが，全て苦痛だった。
生活していくには金が必要だし，働かなければ金は入らない。
金の為に割り切り生活をしていく。僕はいつも嫌気がさしてしまう。
はっきりいって言い訳だ。結局今の現状が続く限り，何を言っても
言い訳になる。これが世間の正当な評価だと思ってもいる。
でも悪循環だ。嫌な物に言い訳をつけて生活していく。
自分が失望するのを避ける為に，嘘をついたり，人の悪口を言う。
それが自分の身を守るとても簡単な防御策。
僕はそんな奴らと肩を並べて笑っている事が許せなかった。
だから仕事を辞める。それが僕にとっての防御策だった。
何をいっても言い訳だ。でもしょうがない。
これが僕の中の真実である以上、誰になんと言われようと曲がり様が
無いものだと確信していたから。

僕は先週、二十三個めの職に就いた。通算，三回目になる飲み屋

の仕事。
以前は従業員が多いところをよく選んだ。
あまり目立ちたくないからだ。しかし今回は、マスターと橘という
僕の四歳
上の人がいるだけの職場。多少迷ったりもしたが，これだけ職歴が
積み重
なった人物を雇ってくれる所も多くないし、夜の仕事で時給八百八
十円は
安い気もしたが，別に対した計画がある訳じゃないので働く事にし
た。

各駅電車が止まる小さな駅、商店街を少し歩き、角に入った路地
裏にある
小さな飲み屋。客の出入りもまばらで，仕事内容に大した事はない。
マスターも橘さんも寡黙な人で，僕としてはとてもやりやすかった。
人にもよるけど，小人数の職場も捨てたものではないと。
僕の仕事はメニューを聞く事、客にお酒を運ぶ事、コップ拭きが
主な作業。
その「メニュー」を聞いて，マスターと橘さんがお酒をつくったり，
調理したりする。
客がいない時は何をする訳でもなく，マスターのかけた音楽を聴い
ていたりする。
マスターはそれを聞きながらキャスターマイルドを吸い，
橘さんはたいてい本を読んでいる。
僕はそんな時，サラリーマンの窓際族ってこんなもんかなと考えた
りする。
結局行きつく所ってこんなものなのだろうかって・・。

ある時，僕がコップを拭いてると橘さんがこんな事を言った。
「ずーっとコップ拭いてると哲学感じる時ない？」

「え？」
「なんで俺コップなんか拭いてんだろうって」
「・・はぁ。」
その時は気のない返事で返していたが，後々になってもその言葉は僕の頭を離れなかった。

橘さんは大学の時から，ここのバイトを始め，卒業してからもずるずる
居着いてる。
「楽しいからね。」
と橘さんは言っているけど，僕にその言葉の意味はよく解らなかった。
普通に就職すれば，今以上にお金も手に入っただろうし，少なくても世間体は気にしなくてすむ。でも橘さんは僕のそんなヘタクソな質問に対し，
「そうかもねぇ・・」
と他人事のように答えるだけだった。

お客が三人、入ってくる。
会社帰りのサラリーマンのようだ。お酒も入ってるらしく，
かなり顔も赤い。
ボックス席に座ったお客の所へ僕はメニューを持って注文を取りに行く。
ここのお客は常連組が多く，それが原因してか，かなりマナーが良い。
注文を取り，カウンターに戻ると一斉に煙草を取り出し，ボソボソ話し始めた。
「巨人負けたねぇ・・」
「・・巨人って強いんですか？」
「弱いねぇ・・今は・・」

「じゃあ負けて当り前でしょ」
「・・・ねぇ、何で自分が巨人ファンになったか覚えてる？」
一人の男が口を挟む。
「ん？」
「俺は別にどこファンでもないから・・」
「宮西さんは巨人ファンですよねぇ」
「ああ、まぁ、ちっちゃい頃からテレビで見てたし・・んー、何だろ・・」
「それって洗脳だと思いません？」
「え？」
「ナチスみたいにメディアをうまく利用した感じじゃないですか。」
「んー、でも、もっと何か魂を揺さぶられたって言うんかねぇ・・んー，なんだろ・・」
「だから今、アンチ巨人が増えてるってのは体制批判的なものがあるんじゃない
かと思うんですよねぇ・・・」
「と言うと？」
「俺はお前達と違うんだぞ的な・・・」
「んー、で、君はどこファンなの？」
「ダイエー、王が監督だから・・」
酒場の客はよく、どうでもいいことで討論している。
僕はそんな話を聞くたびにその真剣さがとてもおかしく感じる。

早朝五時。店の閉店時間。
僕は誰もいなくなった店内を掃除し、看板をしまう。
看板は入り口の横に、古い木製椅子の上に立てかけてある。
ｃｈａｉｒと書かれたこの看板はマスター手製の気彫りらしい。
椅子の上にｃｈａｉｒと書かれた看板が置いてある事が、とても滑稽で、
その雰囲気を僕は気に入っていた。

看板を持って店に入るとマスターが水割りを飲み，ジャズを聴いていた。
橘さんはもう帰ったらしい。
僕は看板の事を聞いてみたくなった。
「マスター」
「ん？」
「何でこの店、ｃｈａｉｒって名前つけたんですか？」
「聞きたい？」
「差し支えなければ・・・」
「んー、・・・・・・・・・椅子。」
「椅子？」僕は馬鹿みたいに繰り返した。
「何となくだけどね。ちょっとした腰掛って言うのかなぁ・・・
そんな物があると嬉しいと思わない？」
「はぁ・・」意味がよく解らない。
「休憩所だとカッコ悪い名前でしょ？」
「そうですね。」そう思った。
「でも、そんなような意味を込めてみたかったんだなぁ・・きっと。」
「休憩所？」
「そう、みんないろんな事して疲れてんだからさぁ、ちょっと座って休もうぜ。
君の為の椅子はいつもあるからさぁ・・って意味なんだけど，解るかな？」
「何となく・・」
「・・・俺も腰掛のつもりだったんだけどね。」
少し垂れたお腹をさすり，そう言って笑った。
マスターは昔，音楽家を目指し，サックスを吹いていた。
芽が出ぬまま悶々と日々を過ごし，気がつけば友人の飲み屋を
譲り受け，この店を開いたという。
「もう演奏はしてないんですか？」

「しないね。何だかこうやって聞いてるだけで満足しちゃうしね・・
まぁ、
結局の所、音楽で成功していようが最終的にはこういう好きな曲聴
いて、
好きな酒飲める。そんな飲み屋を開きたいと思ってたからね。
ちょっと隠居が早まったと思えば楽しいもんだよ。」
「そんなもんですかねぇ」と僕が言った。
「どうだろうね。」とマスターが言った。
　マスターに挨拶をして帰ったのが午前五時半頃。
僕はシャッターの閉まった駅前の商店街をブラブラ歩いて帰る。
この時間帯の空は沖合いの海の如く深い青色になっていてとても好
きな色だ。
遠くで聞こえる新聞配達のケッタの音。
それ以外は日の出のように静かで、とても心地良い時間になってい
た。
　僕は部屋へつくとハイライトマイルドを一服し，布団をひいて
風呂ガスの元栓をひねる。十五分ほどで風呂が沸き，ゆっくりつか
る。
多少ぬるま湯の方が気持ちいい。風呂から出て，Tシャツに着替え
布団に潜る。
少々冷たい布団が居心地の良さを高めてくれる。
テレビをつけ、本を読み、空が充分に明るくなった頃、僕は深い眠
りにつく。

一　恋愛　一

　僕は恋愛経験が少ないのかもしれない。
人一倍喋るのが苦手だし，自分から好きな相手に告白するなんて
縦笛の試験を全校生徒の前でやらされるより辛い。

とにかく自分に自信がないのだろう。
でも、まったくないって訳でもない。世の中には物好きもいるもので，
こんな僕にも好きと言ってくれる女の子がいたりした。
でも長くは続かなかった。僕の甲斐性なしのせいもあるが、基本的に人付き合いが苦手なんじゃないかと考えさせられるだけだった。
いや、それだけなのだろうか。僕は未だによく解らない。

その日の十時頃、常連の中島君が落ち込み気味でやってきた。
そんな様子に心配してか橘さんが，
「どうしたの元気ないね。」と声をかけた。
「・・・ふられました。」
注文した日本酒を一気に飲み干す中島君。
「直子ちゃんに？」
「そうそう、直子ちゃんにです・・・」
「なぁーに、何が原因なの？」マスターが楽しそうに口を挟んだ。
「解らないですよ。突然なんですから・・・」
橘さんはマスターに任せたとばかりに僕の横へ来て洗っていないコップに手を伸ばす。
「そんな事ないでしょ、何か心当たりあるんじゃないの？」
マスターは普段、無口なくせに、人の不幸話には乗り出すように話す事が最近解った。
「いやね、なんか最近電話の数が減ってきたなってのは気になってたんですけど・・・」
「いつふられたの？」
「1週間前です・・・」
それから中島君はお酒が回ったのか，救急患者の如く辛い現状を訴え始めた。
「眠ろうとしても眠れないんですよ。ベットに入って部屋を暗くす

ると、いつも直子
の事を考えてしまうんです。何だか不安だけが募っちゃって・・・」
「何が不安なの？」
「よく解んないです・・・何かでも・・安心したいんです。とっと
と眠って
次の朝になればまた大学で気が紛れるのに・・・」
「会いたいの？」
「ふられた方は、忘れる為に時間をかけるしかないんだと思うんで
すけど・・・」
「ふられたんだもんねぇ・・・」
「・・何か、自分に理屈つけたくなるんですよね・・・」
「と言うと？」
「自分の嫌われた理由を探して、それに対して必死にその理由を弁
解し始めるん
です。・・・顔がよぎって・・・・・ずーっと頭から離れないのが，
別れる時最後に
見た顔。それと楽しかった日々。電話したくなる衝動。やり直した
いと伝えたくなる
気持ち。誰か別の人を好きになって紛らわせたい感覚。でも、彼女
の事が好きという
気持ちが残ってしまう・・」
「ほー。」とマスター。
「これが普通かもしれないけど・・・でも信用していた子に裏切ら
れたっていう気持ちは
いつ消えるんだろうかって・・・」
「どんな別れ方したの？」
「あなたの事、好きだけどもう会わないでいましょうって・・・・」
「それはずるいね。」
「でも彼女は僕をあまり傷つけたくないと思って言ってくれた事だ
と思うんですけど・・・」

「それは違うだろ。彼女自身が傷つきたくなかったんだよ。」
「でも、僕、物凄く悪い事したように思うんです。とてもまわりくどく会えない事を非難
していたと思うし、彼女の生活に何か・・水をさしているみたいで、全てが空回りして、
僕自身が凄く邪魔な存在に思えたし、何か彼女は俺の事、好きなのかって葛藤も
あったし・・・・」
「怒りは無かったの？そんな彼女に・・・・」
「え？」と中島君。
「あまり会えなかった理由はなんなの？」
「まぁ・・彼女の都合が悪かったり何ですけど・・母親との用事が入ったり、友人との
約束があったり、でも僕自身も知っての事だし・・・彼女が悪い事してた訳じゃないし・・・」
「なぜふられたの？」とマスター。
「突然だからよく解らないんですけど・・・でも、僕が悪かったんだと思います。いくつか
思い当たるところはありますし・・たぶん僕が悪かったんです。」
「そんな自分に責任押し付けたって何も良い事ないよ。彼女だってそんな中島君の
気持ちに気づいてやれなかった訳だし、彼女にだって責任はあるよ。」
「・・・・・・。」
「彼女の事を悪く言いたくないのは解るけど・・・」とマスターは付け加えた。

　それから一時間ほど二人は話し込んでいた。
僕と橘さんは邪魔をしていけないと，客のいないボックス席へ行き、橘さんが

作ってくれた夜食の皿うどんを食べていた。
「歌うぞーッ！」
マスターが突然大声で叫び，僕らは驚き振り向いた。
「今日はふられた祝いにおごってやる！そのかわり俺に付き合え！
中島君に
とっておきのラブソング聞かせてやる！」
とマスターは言うと僕らに
「俺，中島君とカラオケに行くから後、よろしくね。」
と言い，あまり乗り気で無さそうな中島君の肩を抱き，出ていった。
その日、マスターは閉店時間になっても帰ってこなかった。

次ぎの日マスターは気持ち悪いからと言って店を休んだ。
僕は橘さんと客の来ない店内でボーっとしていると今度は中島君を
ふった張本人
直子さんがやってきた。
「こんばんわ・・いいかしら・・・」
「あ、どうぞどうぞ。」と橘さん。
カウンターに腰掛ける直子さん。カシスソーダを注文したら、遠く
を見つめたまま
石造のように動かなくなった。橘さんがカシスソーダを作って前に
出すと，
独り言のように
「人の心を傷つけるのって物凄い罪よね・・・」
中島君と同じくこちらもかなりまいっているようだ。
「中島君の事？」と橘さんは聞き返す。
直子さんは静かに頷いてから
「知ってたの・・・」と囁くような声で言った。
「昨日、中島君来てたから・・・」
「私ね・・ずるいのよ。相手に嫌われたくないしね・・うまく言え
なかったのよ・・」

「何が？」
「別れの言葉。結局曖昧な態度とっちゃった。」
僕はやる事が無かったので、ぴかぴかのグラスをもう一度拭き始めた。
「だって、人を傷つける行為って、どんな理由があるにしろ罵声を受けて当然の
事だと思うのね。でも、私は彼の中で・・・と言うか，人に悪口を言われるのが恐いのよ。
結局、自分がかわいかったんだわ。そして勇気が出せなかった。」
「勇気を出すのって大変な心構えがいるよね。」
橘さんが重苦しい口調で言った。
「でも・・みんな自分がかわいい・・・と言うか、大切には思ってると思うよ。」
と付け加えた。
「そうかもね・・ある意味。・・・・でも彼が傷つくわ、私は自分だけの為に彼を傷つけ
たのよ。自分だけの為に・・・」
「どうして別れたの？」
「・・・まだうまく話せないと思うけど・・・彼って・・私のせいでこの人、自分がなくなって
いっちゃうんじゃないかって思ったの・・・」
「どうして？」
「・・・なんて言えばいいんだろ・・・彼，私の事、自分の一部のように思っててくれた
みたいなの・・・。」
「それが彼が駄目になって行く理由？」
「解ってもらえないかもしれないけど・・・何だろ，彼は自分が思っている事は私も
思っていてくれている・・っていうか・・・彼がこうしたいと思っている時、私もそれを

望んでいると思っていたと思うのよ。たぶん・・・」
「それが苦痛になっていったの？」
「理屈じゃないんだけど・・そんなような事感じたの・・・私は彼と生きていきたかった。
だからって私なしじゃ生きていけないって状況じゃなくて・・・お互いの欠点を注意し
あって、一緒にお互いを見つめていきたかったの・・・・・解ってもらえる？」
橘さんは少し考えてから，
「・・・愛してたんだね。」と答えた。
直子さんが小さく微笑んだ。
「でも、結局は私は自分がかわいかっただけなのかなって思って・・・逃げてたのか
なって思って・・・彼は今，凄く悩んでると思うのよ。私の事思いつづけて・・・私を嫌いに
なれないでいて・・・ちょっとずうずうしいかな？」
「ちょっとだけね。」と橘さんは少し笑った。
「・・・でも、私は罵倒が恐かったわ。彼が私の事を非難している姿を想像するのが
恐かったの・・・勇気が出せなかったわ・・・ずるいよね」
「ずるくてずうずうしい女だ。」
橘さんは少し冗談交じりで言った。
「でも、尊敬するよ。直子ちゃんの事。きっと中島君も凄くいい経験、出来たと思うよ。
うらやましいぐらいだよ。」
「優しくふられた事が？」
「今は辛いかもしれないけど，きっと立ち直ってくれると思うよ。
そう思ってるだろ、
直子ちゃんも？」
「私を損させた気分にさせないでよね。私ふったのよ彼の事。」

直子さんも冗談混じりで切り返し，少し元気が出てきたみたいだった。

それから直子さんは、軽く頬を赤らめるぐらいお酒を飲んで，
「ありがとう。落ち着いたわ」と言って店を後にした。
僕は中島君や直子さんがうらやましく思えた。
必死で生きていこうとしている。そう感じんた。そして僕はどうなのかと少しの間
考えてみた。だけど結局解らないままだった。
いや、解りたくなかったのかもしれない・・・。

朝の四時半。閉店の三十分前。いつもこの時間に彼女はやってきた。
彼女の名前は涼子さん。カウンターに座り，黙ってお酒を飲んでいる姿はとても魅力的。
ロングヘアーの髪の毛から、いつも良い匂いがして僕は眠いのと重なり
ぼーっとしていた。
彼女は橘さんの恋人で，一緒に暮らしている。
いつも二人、肩を並べ駅前の商店街を帰っていく。そんな後ろ姿を看板を
片付けながら「いいなぁ」といつも呟いて見ている。
二人の後ろ姿を見ながら，直子さんの話を思い出してみた。
この二人はどうなっていくんだろう。そして僕は・・・。
僕はこれから起こるであろう恋愛に一抹の不安と大きな期待をただ楽しんでいた。
でも、「僕に彼女ができるのかねぇ」と考えるとその楽しみはため息の中へと消えていった・・・。

― 仕事 ―

僕は仕事が続かない。しかし、今回は割りと続いている。
がしかし、ついにやってきてしまったこのだるさ。今回ばかりは、
批判すべきものが
見つからない。でも、言い訳なんて何にでもつけられるものだ。
夜が遅い。給料が安い。自分の時間がつくりにくい。でも、これは
言い訳にならない事も
勿論、解っている。何故なら，それらを知った上でこの仕事を引き
受けたわけだし，
それらに僕は不満がなかった。そんな事を考えると実は今までの事
も、自分の怠け心で
仕事を辞めていたのではと，考えてしまった・・・。

「ずーっとコップ拭いてると哲学感じる時ない？・・何でおれコッ
プなんか拭いてんだろうって」

橘さんの言葉が過った。
暫らく考えてみた。やっぱ金のためかなぁって思えた。

バイト中、橘さんに聞いてみた。
「橘さん覚えてます？」
「何を？」
「コップ拭いてると哲学感じる時ないって、なんでコップ拭いてる
んだろうって言ったの・・。」
橘さんは笑いながら。
「あー、覚えてたの。」
「橘さんは答えが出てるんですか？」
「んー、答えになるかどうか解らないけど・・・。」
「はい」

「僕の場合はもう、歯を磨くのや，風呂に入るのと同じ感覚になってきてるけどね・・。」
「・・・はー、」
僕は間の抜けた返事をしていたが、何となく，その意味を理解できるかもしれないと
思った・・。
「でもね、常に自分の現状に疑問を持つ事は良い事だと思うよ。
どこか矛盾が出てきたらそれらを正していく事が成長だと思うしね。
それが逃げじゃなかったらね」と橘さんは付け加えた。
僕は今まで逃げていたのだろうか？
その答えを出すのはまだ早いような気がした。

カウンターで美濃部さんとマスターが話をしている。
美濃部さんはマスターの大学時代からの友人で，ちょくちょく飲みに来る。
「お前はいいよなぁ・・」と美濃部さん。
「何が？」
「だって楽しそうだもの，上司にどやされる事もないし、結婚もしてないだろ？
結婚，ありゃするもんじゃないよ，会社から疲れて帰ってくりゃ，ずーっと近所の
愚痴聞かされんだぜ・・ホント，俺の休まる場所はどこにあんのって、つくづく思うよ。」
「いいじゃない、お前だって愚痴ったりしてんだろ？俺なんか愚痴る相手、全然いない
んだから。」
「お前愚痴あるの？」
「いやぁ・・大したもんは無いけど・・・・」
「だろ？だってお前、世間で生きてないもの。隔離された生活の中で生きてんだから。

金の心配だってあまり無い。配偶者も無い。人間関係で悩むってのも無いだろ？
好き勝手生きてんだから、愚痴られたらそれこそこっちの愚痴になるよ。」
その時，入り口のドアが開きお客が入ってきた。僕は初めて見る客だ。
しかし、美濃部さんとマスターはかなり驚いてる様子。
「山下？！」とマスターが確認する様に言った。
その客は「おう。」と笑顔で答え，美濃部さんの隣に腰掛ける。
僕はその客を見ながら，どっかで見た顔だなぁと思い，橘さんに
「常連さんですか？」と聞いてみた。
橘さんは答える変わりに，笑顔で棚を見てみろと目配せする。
その幾瓶も酒が並だ棚に置いてある写真額。
マスターの学生時代の写真。
サックスを持ったマスターとピアノに腰掛けた男性との写真。
そのピアノの人が山下さんだと気づくまで時間はかからなかった。
僕はそれで見た事ある顔だなと納得してると，
「ジャズピアニストの山下龍介さんだよ。」と橘さんが言った。
「え？」僕はその名前を聞いて驚いた。
山下龍介といえば音楽にあまり詳しくない僕でも名前を聞いた事がある程の
世界的なジャズピアニストだ。
しかもその有名人が，マスターの友人である事に二重の驚きがあった。
「いつこっちに着いたの？」とマスター。
「今朝。」
「頑張ってるよなぁ，あれよあれよと登りつめちゃってよ。」と美濃部さん。
「自分ではなんの実感無いんだけどな・・・」
山下さんはマスターの出したアーリータイムスに口をあてる。

「お前は最近何してるの？」
山下さんは美濃部さんに聞く。
「お前とは違ってね・・うだつの上がらない中年サラリーマンよ。出世とほど遠い，万年係長ってなもんだ。」
「子供は？」
「おかげさまで大きくなりましてね。今年高校に進学しましたよ。」
「女の子だっけ？」
「そう、清美ちゃん。かわいいよな。」とマスターが言った。
「あれ、お前会った事あるっけ？」
「お前の年賀状だよ。毎年家族写真くっつけてきやがって。」
「うちには来てないなぁ・・」と山下さん。
「お前はいっだって住所不定じゃねぇか。それに外国だろ？金かかるじゃねぇかよ。」
「そうかい。そうかい。」とちょっとすねてみる山下さん。
　僕と橘さんは他にお客がいないと言う事で，残りのカウンターに座り，
マスター達の話を聞かせてもらった。
軽く山下さんに挨拶して、マスターに僕らの紹介をしてもらった。
隅に美濃部さん。真中に山下さん。その隣が橘さんで，僕という並び。
「マスターの学生時代の話、聞かせてくださいよ。何も教えてくれないんですよ。」
橘さんが興味深そうに聞く。
山下さんは少し考えてから，
「サックス吹いてる顔って，結構渋く見えるだろ？まぁ、人にもよるんだろうけどさ、
でも、特にこいつはかっこいいんだよ。だから女というといつもこいつを見てたよな・・・」
僕は棚に置いてある二人の写真を見た。その頃のマスターは今と違ってスマートで，

納得できないでもないと思った。
「でもこいつあまり噂立たなかったよなぁ」と美濃部さんが付け足した。
「何、言ってんだよ。お前がいつもかっさらっちまったんじゃねぇか」
「そうそう、こいつ別に楽器をするわけでもないのに、いつも横にいるだろ？
そしてまたこういう性格じゃない、何だか，いつも女の子の相談乗るような振りして
全部良いとこもってっちまうんだよ。そうそう、そうだそうだ。」
山下さんが楽しそうに言った。
「良いとこもってってるのはお前だろ？何たって今じゃ世界の山下だもんな。」
美濃部さんが取り繕うように山下さんをちゃかした。
「馬鹿言うなよ。それを証拠に俺たちのアイドルみっちゃんと結婚しちまったじゃねぇかよ。」
山下さんもちゃかすように言った。
「それが人生の失敗のはじまりよ・・・」美濃部さんが首を振りながら言った。
「何かいつものろけに聞こえるんですよね。」と橘さん。
それにつけたしマスターが，
「そうなんだよ，何だかんだ言ったってお前が一番、落ち着いたよなぁ・・・。」
美濃部さんは何も言えないという表情で，眉間にしわを寄せ，口をとがらせた。
山下さんはどうなのかなと思い，
「山下さんは奥さんいないんですか？」と聞いてみた。
「こいつは片思いなの。大学の頃から・・・な？」マスターが言った。
山下さんは少し表情を渋くして，

「待たしてるって言った方が正しいかもしれないな・・・」
「要するに、踏ん切りがつかねえって事だよ。いくつだと思ってんだよお前は」
美濃部さんが近所のおせっかいのように言った。

それから僕らはいろいろ話を聞いた。貧乏時代の苦労話、ジャズ喫茶での三人のバイト
生活、美濃部さんの奥さんの話。爆笑だったのが，今はオールバックに決めている
マスターが，一時アフロヘアーにしてたという話。
目をつぶれば必ず思い浮かべてしまうほど似合ってなく、笑われ続けたらしい。

僕は三人の会話を聞きながら，すがすがしい気持ちと，うらやましさが同時に襲い，
何とも言えない喪失感に駆り立てられた。
僕はマスターぐらいの歳になって，このような友人は存在するのだろうかって。
もしかしたら一人もいないかもしれない。そう思うと，寂しさと不安が胸をついた。

いつのまにか時間は過ぎ，空が明るくなりかけた頃，思い出話も一区切りついた。
そして哀愁のようなものが店内を被い出した頃、山下さんがポツリ
「今度ツアーする事になってさ、ヨーロッパ中を回るんだ・・・」
「それは凄いね。」とマスター。
「でかいもんじゃなんだけど・・・でも俺，今度のツアーが納得いくものになったら
プロポーズしようと思ってる。」
山下さんはマスターを真剣な眼差しで見つめながら言った。

「そうか・・・」マスターが静かな微笑を浮かべた。
「お前も来ないか？」
「え？」
きっとその場にいた誰もが驚いたと思う。冗談だとも思った。
「二十年近く音楽をやってきたけど，お前と別れてからまだ一度も納得の行くステージをやった事が無いんだ・・・そこから生まれてくる不安がいつまでたっても拭い切れない。
その不安がもしかしたら俺が音楽を続けられた理由なのかもしれないけど・・・今度は絶対成功させたいと言うか・・納得したいんだ。あいつの為にも・・・」
山下さんの付き合っている女性の事は何も知らないが，山下さんが，音楽とその女性には正直でありたいという気持ちが伝わってきた。
「馬鹿言うなよ・・俺はここ何年もサックス吹いてないんだぜ・・俺なんか出たら納得どころかお前の音楽人生までぶち壊しになるよ。」
「お前なら大丈夫だって、絶対！」
「駄目だって・・お前の周りならもっと凄い奴がうじゃうじゃいるだろうが・・・」
「違うんだよ全部・・俺の知ってる限りじゃお前しかいない・・誰が認めなくても横で弾いてた俺は知ってる。俺はお前じゃないと駄目なんだ・・・頼む！」
「おいおい何か凄い話になってきちゃったなぁ・・・」
美濃部さんが重い空気に水を入れるように言った。
しかしマスターは表情重く，
「お前はそれに賭けてるかもしれないが，俺には俺でここでの生活があるんだ。

そしてこの生活にも自信を持っている。」
「1ヶ月だけでいいんだ！」
静かな沈黙が流れる。
マスターの葛藤も理解できるし，山下さんの情熱も伝わってきた。
僕と橘さんは何も言えるわけなく，事の成り行きに身を任せていた。
「いけよ・・・後悔するぜ。」
美濃部さんが口火を切った。マスターは黙ったまま。
「こいつは本気だよ。俺だってお前らの演奏、一番近くで聞いてたからこいつの気持ちがよく解るつもりだ。お前ならできると俺も思う。」
美濃部さんも真剣だった。
「・・・一番近くで見ていたなら知ってるだろ・・・俺がどんな気持ちで音楽を諦めたかを・・・
一人取り残された俺の気持ちを・・・」
マスターがポツリと言った。また静かな沈黙が流れる。
「だから俺は決めたんだ。山下を応援する事で・・・山下に託す事で・・・・俺達の音楽は
永遠に続いて行くんだって・・・」
美濃部さんが煙草に火をつける。
「・・・俺が言う事じゃねぇかも知れないけど・・逃げてんじゃねぇのか？」
美濃部さんを見るマスター。
「俺はお前らがうらやましかったよ・・・俺は楽器なんかできねぇからただ見てるだけ
だったけど・・・何かそこにお前らといるだけで俺は本当に幸せだった・・・楽しかったよ。
・・・お前にはできるんだよ！逃げるなよ！」
「美濃部・・・」と山下さんは美濃部さんを見た。
美濃部さんは少し笑い，
「いい仕事選んだよお前は・・・俺の仕事とはえらい違いだな・・・

」と言った。
「音楽はそんな甘いもんじゃねぇんだよ・・・」
そうマスターが言うと再び沈黙が流れる。

その時、入り口のドアが開き，そちらの方へ目を配ると涼子さんが顔を覗かせていた。
「今晩は・・・」
橘さんは涼子さんを確認すると，「すいません・・・先、上がります。」と言い，
みんなに挨拶した後，「ごゆっくり」と美濃部さんと山下さんに言った。
そして涼子さんと店を後にした。

それを見送った後，山下さんはカウンターに置いた時計を腕にはめ始めた。
「行くのか？」美濃部さんが言うと。
「ああ・・・楽しかった。」
ジャケットの内ポケットから封書を取り出しマスターの前に差し出した。
「明日夜、十一時、成田のチケットだ。・・・やっぱり無理には誘えないな・・・でも、
気持ちが少しでも向いたら来てくれないか・・・待ってるから・・・」
山下さんは少し寂しげに言った。マスターは山下さんを見て，小さな笑みをこぼした。
山下さんは美濃部さんに
「ツアーのチケット送るから、見に来てくれよな。」と軽く肩を叩く。
その後，山下さんが僕を見たので，軽くお辞儀をした。
山下さんもお辞儀を返してくれた。そして、少し顔を強張らせマス

ターに
「じゃあ・・」と訴えかけるような目つきで言った。
マスターは苦笑いをしながら「ああ。」と答えた。

山下さんが出て行くとまた静かな沈黙が流れた。
時計は朝の六時をまわっている。暫らく静かに飲んでいた美濃部さんが
「始発でたから帰るわ・・・」と店を後にした。
僕はカウンターに座りながら、黙々とコップを洗うマスターを見て，何か言わなきゃと
考えていたが，何も言葉は浮かんでこなかった。
美濃部さんも同じ事を考えていたのかもしれないと思った。
「ごめん・・・」マスターが突然言った。
「え？」
「いや、遅くなっちゃって・・・閉めようか・・・」
「はい。」

僕は看板を片付ける為外へ出た。
日の光が登っていて，一日の始まりを意味している。
通勤のサラリーマンや，部活へと急ぐ学生達がまばらに歩いていた。
僕は椅子の上に置いてある看板を手に持ち，その椅子に腰掛けた。
何となく，マスターと二人きりになる事に時間をあけたかった。
僕はハイライトマイルドを取り出し，吸い始めた。
朝の空気と眠気が混じり，妙に効いた。

店内からサックスの音が聞こえてきた。

レコードの音かと思ったが，まさかと思い，煙草をかき消し，店内へ入った。
店に入るとマスターが僕と背中向けになる形でサックスを奏でてい

た。
その迫力に圧倒された。勿論、曲の題名など解らない。綺麗に整備されて
見えるサックスはマスターの音楽への執着を物語っている様に見えた。
どこまでも深い哀愁が僕を包んだ。僕はただ立ち尽くしていた。
曲が終わった。

店内に時計の秒針の音が響きわたる。
僕はその音で我に返るとあわてて看板を置き，拍手をした。
何か，感想を伝えたかったが，この感覚に合う言葉が見つからなかった。
マスターが僕を見た。目からはうっすら涙がにじんでるように見えた。
マスターは僕に切ない笑顔を向けて、
「・・・やっぱ俺・・これ・・・やりたいわ・・・」と少しだけかすれた声で言った。
僕は何だか無性に嬉しくなり，マスターに笑顔を向けていた。
マスターも何処か恥ずかしそうな笑顔を僕に向けてくれた・・・。

カウンターに美濃部さんが一人座っている。
カウンター内にいる橘さんが美濃部さんと向かい合い，話をしていた。
「あいつらがうらやましいよ」
「でも、これからですからね・・二人とも。」
「それがうらやましいんだよねぇ、俺はただただ流されて生きてきただけだったのかも
知れねぇよなぁ・・・本当。」

「それだって努力は要りますし，大変な事だと思いますよ。」
美濃部さんがニヤリと笑った。そしてコップを拭いてる僕を見て
「がんばんなきゃな・・俺も・・・」と言った。
僕はそんな美濃部さんを見て笑顔で頷いた。
「楽しみだなぁ・・あいつらのコンサート・・・。」
「ええ。」
美濃部さんは静かに水割りを口にすると突然思い出したように
「あ、そうだ！あいつらかみさんと子供の分のチケット、送ってくれるのかな？
言っとかなきゃ・・な？」と子供のようにはしゃぎ、冗談混じりで僕らに言った・・・。

一　祭り　一

町内で，祭りの季節になってきた。
僕はここへ引っ越して二年になるが，一度も祭りには参加してなかった。
小さい頃から，祭り自体に親しみを感じていなかったせいもあるが，何となく足が運ばない。
祭りの思い出と言ったら子供会の盆踊りがある。
祭りの数日前から子供達を集め，何遍も繰り返し盆踊りの練習をやる。
始めのうちは練習後渡されるアイス目当てに通っていたが，そのうち嫌気がさし，
行かなくなった。それを引け目に感じてか，本番当日も足が向かなかった。
もしかして、仕事が続かない原因もこの時すでに始まっていたのではないかと
考えさせられる。ほとほとあきれる始末である。

マスターが山下さんとツアーへ行き，橘さんが代理マスターとなって一週間が過ぎた。
大した問題も無く，いつもの調子で仕事をしている。
何でも僕を雇った理由が、マスターの休みグセかきたらしく，一人ではは辛いからとの理由
で僕を入れたそうだ。しかしマスターは僕が入った途端に休みグセが無くなりたらしく，
橘さん曰く，「良い起爆剤になったんじゃない」と言っていた。

九時を過ぎた頃、中島君が久しぶりに店へとやってきた。
中島君はいつものようにカウンターに座り，ウイスキーをの水割りを注文した。
「マスター，今日休みですか？」
「マスターは今、ヨーロッパ中を回ってます。」と橘さん。
「旅行？」
「コンサートで」
「誰のです？」
「勿論、マスターのですよ。」
橘さんは中島君の反応を楽しむ様に説明している。
しかし中島君は反応を裏切るかのように，
「ああ、やっぱり！」
中島君の意外な反応に少し戸惑う橘さん。
「やっぱ歌手だったんですねマスター」
「は？」訳がわからない。
「ほら、僕がこの前落ち込んでた時、二人でカラオケ行ったじゃないですか、
マスターと二人で，あの時、本当にうまかったんですよ。感動して泣いちゃいましたもん。
やっぱね、ただもんじゃないと思ってたんですよね・・・。」

中島君は納得したように頷いている。
「イヤ，違うんだよ・・・」
橘さんは事の成り行きを中島君に説明した。
「じゃあマスター，暫らくは帰ってこないんですか？」
「この前電話ではね、本当、暫らくあっちにいるって言ってたね・・・一年になるか、
三年になるか・・もしかしたら明日帰ってくる可能性もあるよ。」
「寂しくなりますね・・。」
「いや、ガンガンと僕らに届く噂話が飛びこんでくるかもよ。」と橘さんは楽しげに言った。
「あ！寂しくなると言えば涼子さん。今年で最後なんですって？」
「あれ、もう知ってるの？」
「当り前じゃないですか，この町内では大騒ぎですよ。・・・どうです涼子さんは？」
「気合い入ってるよ。割り箸もって家中のもの片っ端から叩いてリズムとってるからね。
ホント，最近寝不足続きなんだよ・・・。」
僕は話の意味がよく解らなくて，二人に聞いてみた。
「涼子さんなんかやるんですか？」
「え？知らないの？もぐりだね。」と中島君が僕をちゃかす。
「涼子ね，毎年お祭りで太鼓叩いてるんだよ。」と橘さんが言った。
「え？太鼓ってあのやぐらに乗っかって盆踊りに合わせて叩いてる太鼓ですか？」
橘さんが頷く。
「そうだよ、かっこいいんだよねー。」
中島君が思い出すように言った。
　驚いた。あの、清楚で品の良い涼子さんが，手ぬぐいなんか頭に巻いて太鼓叩いてる。
想像つかない。

その日の四時半頃、いつものように涼子さんはやってきた。
僕は太鼓の話が気になってしょうがなかった。
「涼子さん、お祭りで太鼓叩いてるんですって？」
涼子さんはニヤリと笑い頷いた。
「何でまた・・・。」とにかく僕は納得がいかなかった。
「かっこいいのよ、私。今年が最後のチャンスだからしっかりその眼で確認しなさい。」
いたずらっぽい顔で僕を見つめ楽しそうに言った。
「うーん、想像がつかないですねぇ・・橘さんはお祭りでの涼子さんを見て
惚れちゃったんですか？」
「な、なに馬鹿なこといってんの・・・」橘さんが動揺してた。
そして涼子さんを確認するように見つめる。涼子さんはニコニコ笑っている。
橘さんも苦笑いを見せていた。
「でも何で今年が最後なんですか？」
そう質問すると，涼子さんは寂しそうな顔を浮かべた。
そして、ゆくっりと確認するよう、話し始めた。
「私ね，十八の頃からやぐらで太鼓叩いててね，最初は学校の帰り道でおじさん達が
練習してるの何となく見てただけなんだけど・・何か楽しくって毎日のように通っちゃって
・・ある日ね、おじさん達が遊び半分で私に太鼓叩かせてくれるようになったの、
そしたら結構のめり込んじゃって、で気づいたら私が毎年太鼓叩く事になってた。
変なものよね・・何か人気出ちゃって、いつのまにか祭りの名物にされちゃって・・でね、
三年目ぐらいの時かなぁ、町内会の人から月一回だけ子供達に太鼓教室みたいなのの

先生を任される事になっちゃって、だいたいみんな，大きくなるにつれて辞めてっちゃうん
だけど，恵ちゃんて女の子がいたのね。初めた時はまだ中学生で，
あまり身長のない子
でね、バチを持つとお人形さんみたいでホント、可愛かったの。その子、私が太鼓叩いて
るのを見て、こう言っちゃなんだけど，私のファンになってくれてたみたいで，「私も涼子
さんみたいになる」って言うのが口癖で、本当、一生懸命やってくれたの。」
涼子さんは橘さんを確認し，にっこり笑った。
「その恵ちゃんも今年で十八なの・・私が太鼓叩きはじめたのと同じ歳になったのね・・
やっぱり、年寄りがいつまで居座っててても下も育たないでしょ？・・・。
だから今年で最後・・・。」
涼子さんは静かな微笑みを僕に向け水割りを口にした。

お祭り当日。
涼子さんは先に行って準備するので、僕と橘さんは二人で祭りに向った。
夕方，橘さんと落ち合い，街道先の坂を登り，豆腐屋横にある道に入る。
入ってすぐに神社はあった。僕達のほかに何人もの行き交う人とすれ違う。
参道には射的、たこ焼き、お面、金魚すくいなど幾つもの出店が並んでる。
僕と橘さんはラムネを一つずつ買った。
参道を抜けると神社があり，その前を小さな草野球ぐらい出来そうな広場がある。

その広場の真中に四メートルぐらいのやぐらが立っていた。
盆踊りの準備は万端で，所々に吊るされた真っ赤なちょうちんが，
雰囲気を盛り上げている。
広場横の仮説テントの中ではおじさん達が酒盛りをはじめていた。
「涼子さんの所へ行きます？」
「いや、祭りが始まるのを待っていようよ。」橘さんは静かに言った。
僕らは広場横の屋台でやきそばを買い、屋台横の長いすに腰掛けた。
ここなら太鼓を叩く涼子さんをしっかり確認できる。

「えー、それでは盆踊りをはじめます・・・。」
空も暗くなった頃、町内会の実に簡単な説明があり，やぐらの周りを踊りの先生と
その生徒らしきおばさん達が円を作り始める。
おばさん達はおそろいの紺の浴衣で、先生と思えるおばさんだけ深い赤の浴衣を着ていた。
「あ、・・」僕は思わず声を漏らした。
涼子さんがいた。髪の毛を上に結んだはっぴ姿の涼子さん。
驚く事にその格好はなんの違和感も感じさせず，実に似合っていた。
清楚だった涼子さんが今日はたくましく見える。やぐらを登っていくしがさに
風格さえ感じられた。僕は橘さんを見た。
橘さんは穏やかな表情で涼子さんを見つめていた。

　レコードによる民謡らしき音楽が流れ，盆踊りがはじまった。
リズムに乗って涼子さんが太鼓を叩いている。太鼓の音が、心地よいリズムを刻み，
体内で響きわたる。ドンと響く音が，心臓の音のように感じられた。
周りで見ていた人達がおばさん達と混ざり，一緒に踊り出す。
「橘さんは踊らないんですか？」

「うん。僕は見てるほうが好きなんだ。」
その言葉に嘘は見えず，橘さんの表情は明るかった。
初めて見る涼子さんの真剣な表情が，とても輝いて見えた。

何曲かが過ぎていく。神社を覆う木の葉が空の深い色と祭りの明かりが混じり合い，
神秘的に見えた。
「それでは最後の踊りになります。」
またも実に簡単な説明が入った。
やぐらの上の涼子さんを見ると、テントに向いしきりと手招きしている。
そちらへ目を移すと，少し小柄のはっぴを着た女の子が走ってきて，
やぐらを登り始めた。
やぐらの上からペコリと頭を下げる女の子。きっとその子が恵ちゃんなのだろう。
レコードによる音楽が流れ，今度は恵ちゃんが太鼓を叩き出す。
僕は不思議な感覚にとらわれた。涼子さんの太鼓の音が心臓の鼓動なら，
この子の音は、花火だ。僕は花火の空を包み込むようなあの響き方が好きだった。
横で見ていた涼子さんも恵ちゃんと一緒に太鼓を叩き始める。
「ねぇ、踊ろうか？」橘さんが僕を見ていった。
「はい。」
僕らは円の中へと加わった。浴衣おばさんの横を少し派手な女性がハンドバック片手に
おばさんの振り真似をしている。その踊りがおぼつかないのと同時に必死でやってる姿が
僕の笑いを誘う。なにより楽しそうだった。
その少し先で，酔ったおじさんがビール片手に好き勝手踊っていた。
僕と橘さんもある程度周りに合わせながらも，自由に踊った。

建ち並ぶ出店の前では親子連れや、カップル、孫を連れたおばあさん等、
様々な人達が群がっている。
いろんな祭りが氾濫する中，こういう古典的なものが無くならない理由が少し解った気がした。
人の温もりに触れ，他人との一体感を共有する。それらを一時だけ味わう事により，
人が人としての感覚を失わないでいられるのかもしれない。
踊りが終わった。それぞれがお互いをたたえ合い，拍手をしていた。
「それでは・・今年まで太鼓を叩いてくれた涼子さんが今年で最後と言う事で、えー、
皆さんで拍手をしてください。」
実に地味な紹介が流れた。踊っていた人達、見ていた人達も含め，
やぐらの上の涼子さんへ
拍手を送った。
やぐらの上の涼子さんはペコリと頭を下げる。
僕はちょっとした節目を見るようで少しだけ，感動していた。

祭りが終わり僕と橘さんは神社横の公民館の前で涼子さんを待った。
「おまたせーっ。」涼子さんの声がして，僕らは後ろに振り向いた。
涼子さんはオレンジ色に花火の刺繍がは入った浴衣に着替え立っていた。
どこか恥ずかしそうにも見える。
「似合う？」上目づかいで橘さんに言った。
ニッコリ笑い頷く橘さん。
「はっぴはどうしたの？」
「卒業生に贈呈してきたわ。」
「そう・・・。」
「私が卒業生なのかな？」

「隠居じゃないの？」橘さんが冗談交じりに言った。
「もうっ」涼子さんはほっぺをふくらましてのふくれっつら。
その子供っぽい素振りがとても楽しく、僕と橘さんは笑ってしまった。
涼子さんもふきだした。
二人と暫らく歩いた後，僕は長い坂道の途中、用事があると言い別れる事にした。
「それじゃあ・・」と二人が坂道を下って行く。
別に用事なんて無かった。本当はこの二人の後ろ姿を見たかっただけ。
それと早く二人だけの時間を過ごしてもらいたかった。
街灯が続く長い坂道を手を繋いだ二人が歩いて行く。
シャツにジーンズ姿の橘さんと浴衣姿の涼子さん。
街灯に照らされた二人をみて僕はいつものように「いいなぁ」と呟いた。

ｃｈａｉｒでの生活で今までの僕に少し矛盾が出てきている事に気づいた。
僕は他人との関わりに大切さを感じ始めていた。
関わりの中，傷つけられていく事もあるかもしれない。でも、最近立ち向かって
いけるような気がしている。いや、していかないといけないと感じはじめていた。
だから僕はこの決断をした。
「できたら今日でここを辞めたいと思うんですが・・・。」
閉店間近の客がいない店内。僕は橘さんに申し出た。
「どうして？」
「何て言ったらいいのか・・僕もここにお客で来たいなって思って・・・」

橘さんは暫らく黙っていたが，僕の顔を見てニッコリ笑い，
「そっか・・頑張ってよ。」と言ってくれた。
「でも・・もしなんかあったらいつでもきなよ。・・経験者優遇だからさ。」
「ありがとうございます。」僕は橘さんの心遣いが嬉しかった。
「あの・・余計なお世話かもしれませんけど・・」
「ん？」
「一人で大丈夫ですか？暫らく・・・」
僕がそう言うと橘さんはてれた笑いを浮かべ
「涼子がさぁ・・手伝いたいって言っててさ・・・」と恥ずかしそうに言った。
「じゃあ僕は邪魔者にならずにすんだわけですね。」
僕は橘さんをちゃかすように言った。

その日の閉店後，迎えに来た涼子さんを交え、橘さんはささやかな送別会を
開いてくれた。僕は久しぶりに気持ちよく酔っ払った。

あれから数ヶ月が経った。
僕は新しい仕事に就き，何かと忙しい日々を過ごしている。
あの日以来、ｃｈａｉｒには足を運んでいない。
何て言えばいいだろう，少し欲が出てきたのかもしれない。
少しでも成長した僕を見てもらいたいというか・・・。
だから、今度店に足を運ぶ事を今から凄く楽しみにしている。
そしていつも思う，もう少し、もう少しと・・。

真っ赤な夕焼け空の下。僕は駅をおり，商店街を歩いて行く。
道の途中の路地裏へ目を移すと、古い木製の椅子の上に
小さな木彫りの看板が置いてある。ｃｈａｉｒと書かれたその看板

を見ると僕は少しだけ勇気が出る気がするのです・・・。

（後書き）

最初の方を読み返した時に物凄く恥ずかしくなりました（笑）でも、その当時の一生懸命がいっぱい詰まってます。読んで下さってありがとう御座いました。何か報われた気分になります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0034t/

ｃｈａｉｒ

2011年5月7日08時46分発行